り、其人となり異なり、夫遊女うかれ女といへども、往昔を尋見れば、此里にも寛文の頃には、小紫は能和歌の道に達し、不斷敷島の道を尋ね、風雅にして心やさしく、世上こぞつて偏に石山寺の觀世音にて、源氏六十帖編集したる紫式部にも似たりとて、其名を小紫と號しとなり、名高き雅女たり、○中略又島原の吉野は、初め浮船と名乘しを、或春廓櫻の花盛を見て、島原籠中の吟として、

こゝにさべさぞな吉野は花ざかり、と云名句有しゆへ、これより世に吉野と呼れける、又正德の頃とかや、江戸町茗荷やの奥州が提灯の文字、貞清美婦胎と云五文字の裏に假名にてれんいつはりなしと書て、中の町へ持せ道中せしとなり、其後享保の頃、萬字や九重が浮世の末に、隅田川の三十一字に、奉行大岡忠相の猛き心を和らげしと、要秘録に先達てしるし出したり、是等皆々廓の花紅葉と、其時々のさかり成べし、今は皆散果し、又來春も咲花の絶ずして、今○寶曆松葉屋の瀨川と云、器量甚勝て、此里隨一の美人、王照君西施も面を恥、通小町も顏を覆ふ姿なり、其生れ下總國小見川のかろき民の娘たり、幼少にて松葉や半右衞門抱て教ける、自然と女の道たることを不學して是を知、妓女の藝一ト通り、三味せん、淨瑠璃は勿論、茶の湯はいかゐ、碁雙六、ありとあらゆる藝、不思議に習ひて、鞠なども、上手なり、皷笛諷舞も能、其上能書にて俗氣をはなれ、廣澤烏石が流義、文徵明が墨跡に眼をさらし、唐詩選を取廻し、歷々の儒者の門弟にも爪をくはへさせ、繪も上手にて、京下り秋平大雅堂が弟子と成て、畫工にくはしく、俳諧は乾什米仲が引付に入て、ことゞく人の知る所なり、其上易道に委しく心を用ひ、平澤左内が弟子と成て、卜筮を學びけり、

〔後者昔物語〕巴屋○吉原に岩こすといふ傾城は、秀たるものなりき、渠はもと越後信濃あたりの深山のものにて、山女衒行かゝりて見れば、老女只壹人、六七歳の小女とあやしき家居に住むあり、立よりて問へば、此小女は父母におくれて、我手に育侍るといふ、かゝる所にあらんよりは、我江